

平成28年度 研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

「豊かな国際感覚を育み、コミュニケーションへの積極的な態度と確かな英語力を育成する小中一貫の外国語教育の創造」

小学校低学年の導入期を経て、小学校第3～4学年で「外国語活動」を、第5～6学年で「外国語科」を実施した場合の、小・中学校における教育課程やカリキュラム、指導及び評価方法の在り方等について研究開発を行う。

※H27年度より _____ に変更

2 研究の概要

徳島県教育委員会と鳴門市教育委員会の指導のもと、関係諸機関（研究組織別紙参照）と密接な連携を図り、地域の実態に即した実践研究を進める。さらに、本地域での取組を段階的に市内全小・中学校へ広げることを想定し、外部評価委員会を設けて、成果と課題を十分に検証する。なお、鳴門市第二中学校と鳴門市林崎小学校2校が中心となって研究開発を進めるが、同じ校区内にある鳴門市里浦小学校は実践協力校として、また、鳴門市内の県立高等学校2校（鳴門高校、鳴門渦潮高校）と鳴門教育大学を研究協力校として位置付け、連携を図りながら取組を進めることとする。

主な研究内容は次の通り。

- (1) 9年間の学びの連続性を踏まえた教育課程、カリキュラム編成と指導・評価の在り方
児童生徒の発達段階を考慮し、小学校第1学年から中学校第3学年までの学びが滑らかにつながり、かつ、上記の研究課題解決を図ることができる教育課程やカリキュラム、指導や評価の在り方を探る。試案として、発達段階を考慮し、9年間を、①導入期（小1～2）、②体験期（小3～4）、③接続期（小5～6）、④学習期（中1～3）に分け、それぞれの段階毎に明確なゴール（目標）を設定し、その目標達成を目指す。
- (2) 国際的な視野やコミュニケーション能力を育成するための体験活動の在り方
- (3) 実現可能で意味のある連携の在り方
（市内にある2高等学校、鳴門教育大学も含む）
- (4) 校内体制の構築と指導力向上のための研修の在り方

3 研究の目的と仮説等

(1) 研究の目的

児童・生徒に豊かな国際感覚を育み、コミュニケーションへの積極的な態度と確かな英語力を育成するため、教育課程やカリキュラム、指導及び評価方法等についてその在り方を探る。

(2) 研究仮説

9年間で育てる「生徒像」を明確にし、その目標達成に向けた小中一貫の外国語教育を行う。小学校第1学年から中学校第3学年までを4期に分け、学びの連続性を考慮した段階的な指導を行うことにより、「豊かな国際感覚とコミュニケーションへの積極的な態度、確かな英語力を身につけた生徒」（目指す生徒像）が育成されるであろう。

(3) 必要となる教育課程の特例

小学校第3～4学年においては、総合的な学習の時間の時数を削減して外国語活動を設置。小学校第5～6学年においては、総合的な学習の時間と外国語活動の時数を削減して「外国語科」を設置。（ただし、小学校5・6年生は段階的に移行する。）

※H27年度より _____ に変更

4 研究内容

※内容に関しては、平成28年度に実施したものである。

【教育課程】

(1) 編成した教育課程の特徴

① 概要

小学校第1学年及び第2学年

「英語活動」(年間8時間) ※余剰時間の活用

- 1) 目標 《導入期 ～出会う～》

様々な人との関わりや体験的な活動を通して外国語の音声に慣れ親しませる。

- 2) 内容・特徴

児童にとって身近な語彙や表現を扱い、英語を使った体験的な活動を行う。また 英語活動以外にも、他教科や他領域の学習に ALT が参加するなど交流の場を設ける。

- 3) 評価

【評価の観点及びその趣旨】

外国語への慣れ親しみ
体験的な活動を通して、活動で用いている外国語を聞いたり、話したりしながら、外国語の音声や表現に慣れ親しんでいる。

※「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」に関して

低学年の児童の発達段階や英語活動の時間を考慮し、「(英語を使った) コミュニケーションへの関心・意欲・態度」は評価しない。しかし、3年生への接続を考慮し、他者との関わりを意識した活動を授業の中に多く取り入れるとともに、教育活動全体を通して、コミュニケーションへの関心・意欲・態度の育成を図る。

【評価方法】

毎時間の行動観察、感想

- 4) 実施の工夫と移行

H26	第1学年及び第2学年	6時間実施	(余剰時間の活用)
H27	第1学年及び第2学年	8時間実施	(余剰時間の活用)
H28	第1学年及び第2学年	8時間実施	(余剰時間の活用)

小学校第3学年及び第4学年

「外国語活動」(週1コマ 年間35時間)

- 1) 目標 《体験期 ～親しむ～》

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

- 2) 内容・特徴

現行の外国語活動に即して3観点に沿った指導と評価を行うが、3年生では、特に「外国語への慣れ親しみ」と「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」に重点を置く。また、段階的にアルファベットに慣れ親しむ活動を組み込む。

4年生では、3年生で重きを置いた2つの観点に加え、「言語や文化に関する気付き」についても重視する。さらに、5年生からの「外国語科」へのつながりを考慮して、アルファベットを集めて言葉を作ったり、自分が選んだ言葉を書き写したりするなど、体験的な活動を通して文字に慣れ親しませる。

- 3) 評価

【評価の観点及びその趣旨】

コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語への慣れ親しみ	言語や文化に関する気付き
コミュニケーションに関心をもち、積極的にコミュニケーションを図ろうとする。	活動で用いている外国語を聞いたり、話したりしながら、外国語の音声や表現に慣れ親しんでいる。	外国語を用いた体験的なコミュニケーション活動を通して、言葉の面白さや豊かさ、多様なものの方や考え方がることなどに気付いている。

【評価方法】

毎時間の行動観察、振り返りシート・感想、ビデオ等による記録、児童への意識調査

4) 教育課程編成の工夫と移行

H26	第3～5学年	年間35時間実施	(総合的な学習の時間の活用)
H27	第3学年及び第4学年	年間35時間実施	(総合的な学習の時間の活用)
H28	第3学年及び第4学年	年間35時間実施	(総合的な学習の時間の活用)

小学校第5学年及び第6学年

「外国語科」(週2コマ 年間70時間)

1) 目標 《接続期Ⅰ～つなげる～》

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、身近で簡単なことについて外国語の基本的な表現に関わって、聞くことや話すことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。

2) 内容・特徴

外国語活動と中学校の英語科とをつなぐ新しい時間とし、中学1年生への段差を低くするための「期間」と考える。その際、他教科や総合的な学習の時間等との関連を図り、児童の知的好奇心を満足させるよう、題材や指導内容の充実を図る。

また、文字学習(アルファベットの読み書き、活動で扱う初歩的な語や文を読んだり書き写したりすること)を導入する。

3) 評価

【評価の観点及びその趣旨】

コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語や文化についての知識・理解
コミュニケーションに関心をもち、積極的にコミュニケーションを図ろうとする。	身近で簡単なことについて、初歩的な外国語を用いて自分の考えなどを話したり、単語や表現を選んで書き写したりして、自分の気持ちや考え、事実などを表現している。	身近で簡単なことについて話される、初歩的な外国語を聞いたり、文字を手がかりにしたりして、語の意味や話し手の意向などを理解している。	体験的な活動や初歩的な外国語の学習を通して、外国語の特性を知り、基本的な知識を身に付けるとともに、多様な言語や文化があることを理解している。

【評価方法】

毎時間の行動観察、振り返りシート・感想、ビデオ等による記録、児童への意識調査
パフォーマンステスト、英語クイズ(読む・書く等)

4) 教育課程編成の工夫と移行

H26	第6学年	年間50時間実施	(外国語活動と総合的な学習の時間の活用)
H27	第5学年	年間50時間実施	(外国語活動と総合的な学習の時間の活用)
	第6学年	年間70時間実施	(外国語活動と総合的な学習の時間の活用)
H28	第5・6学年	年間70時間実施	(外国語活動と総合的な学習の時間の活用)

中学校第1～3学年

「英語科」(週4コマ 年間140時間)

1) 目標 《接続期Ⅱ(中学1年)～つなげる～、充実期(中学2・3年)～深める～》

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図るとともに、身近な話題についての理解や表現、簡単な情報交換ができるコミュニケーション能力を養う。

2) 内容・特徴

上記の目標については、中学3年生の学習到達目標の中身を言語活動の充実により質的に向上させるという視点に立って設定した。授業時数は現状を維持し、現行の教育課程で実施している。しかし、平成28年度からは教科としての外国語の指導を70時間受けた生徒

が入学してきたことを踏まえ、中学校入学当初に扱う指導内容の精選を図り、スタートカリキュラムを再編成した。

3) 評価

【評価の観点及びその趣旨】

コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語や文化についての 知識・理解
英語を用いて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする。	身近な事柄について、英語で自分の考えを話したり書いたりして、自分の考えなどを表現している。	身近な事柄についての英語を聞いたり読んだりして、話し手や聞き手の意向などを理解している。	外国語の学習を通して、言語やその運用についての知識を身に付けているとともに、その背景にある文化などを理解している。

【評価方法】

ア 生徒による評価	自己評価・相互評価
イ 教師による評価	校内テスト（リスニングテスト、ライティングテストを含む） 行動観察、パフォーマンステスト等（ビデオ等の記録も含む） 音読テスト
ウ 客観的評価	英検 IBA・英検

② 授業時数と指導体制の工夫

小学校第1学年から中学校第3学年までの授業時数と指導体制を次のように設定した。

学年	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
	英語活動		外国語活動		外国語科		英語科		
授業時数	8		35		70※		140	140	140
指導体制	学級担任 ALT 小学校コーディネーター		学級担任 ALT 小学校コーディネーター		学級担任 ALT 小/中コーディネーター		中学校教員 ALT		

※印は段階的に導入

小学校第3・4学年において、「総合的な学習の時間」の時数を削減して「外国語活動」を、第5・6学年においては、「外国語活動」と「総合的な学習の時間」の時数を削減し、「外国語科」を設置した。第1・2学年は余剰時間に「英語活動」を設定した。

【小学校】

(1) 新教育課程の実施（指導内容・方法・教材）について

外国語活動を3・4年生で35時間実施し、外国語科を5・6年生で70時間実施した。主な指導内容・指導方法・教材の概要を次に挙げる。

① 外国語活動

- ・3・4年生については「Hi, friends!」をベースに他教科や領域との関連を図りながら、学年の発達段階に応じた単元を計画し、活動内容や指導方法を工夫した。3年生では歌や絵本、体を動かす活動を多く取り入れ、楽しみながら英語の音やリズムに慣れ親しむようにし、4年生では、言語や文化に関する気付きとともに、3年生段階よりもさらに相手意識や伝える中身に重きをおいたコミュニケーション活動を重視した。
- ・2年間の外国語活動を通して、段階的にアルファベット（文字）に慣れ親しむことができるよう、各学年にアルファベットに関する単元を組み込み、児童の発達段階や興味・関心を考慮して、活動内容や指導方法を工夫するようにした。

② 外国語科

- ・これまで外国語活動で大切にしてきた「話すこと」「聞くこと」による音声でのコミュニケーション活動は重視しつつ、「読むこと」「書くこと」を加えた指導を行う。ただし、「読むこと」「書くこと」自体が目的とならないよう、あくまでも「文字」は、コミュニケーションの幅を広げ、豊かにするための一つのツールであると指導者が捉え、そのよさを児童自身が実感できるよう、活動内容や指導方法を工夫する。
- ・十分に音声で慣れ親しんだ簡単な表現について、文字を手がかりに語を識別したり意味を捉えたりすることなどへの意欲や態度を育てるために、教材の開発に努める。絵カードについては、絵が大きいもの、文字が大きいもの、また文字だけのものを意図的に作成し、児童の実態に応じて段階的に使用できるようにする。また、児童の興味関心を高め、体験的な理解を促すために、ICT教材の有効活用や開発に努める。
- ・「書く活動」を扱う際は、4線上に表記した語や表現例を示し、その中から児童が書きたいこ

とを選んで「書き写す」ようにする。その際、符号や表記の仕方等についても併せて指導を行う。

【授業設計について（全学年を通して）】

- ・「バックワードデザイン」による授業設計に努める。ゴールを明確にし、指導と評価の一体化を目指す。
- ・児童が思わず「聞きたくなる」「言いたくなる」「やってみたくなる」、つまり児童の「心が動く」授業づくりに努める。
- ・「必然性」（場面設定、相手・目的意識）を重視し、意味のあるコミュニケーション場面の設定に努める。
- ・各学年の1年間の学習内容を見通し、他教科等との関連を考慮して年間指導計画を立案する。他教科等で得た共有体験や知識を踏まえ、それを生かすことで、児童の意欲が高まるとともに、外国語の授業の内容が深まり、充実すると考える。
- ・「関わり合い・学び合い」を重視した活動や授業展開を工夫する。授業の中に、ペアやグループ等多様な学習形態を意図的に取り入れ、「人と関わりつながり合う喜び」「コミュニケーションの楽しさ」などが体験を通して実感できるようにする。

【教材について（全学年を通して）】

- ・児童の目が輝き、心が動く授業を展開するには、教材の発掘や開発、活用の工夫が不可欠である。児童に問い、その反応に学びながら、活動のねらいや児童の興味・関心に沿ったものとなるよう日々工夫・改善に努める。

《使用教材》

絵カード（教科の授業では、一つの単語に関して、絵や文字の大きさを変えたもの、文字だけのもの等数種類用意する）、写真、ICT教材（文部科学省より配布されている「Hi, friends!」や「Hi, friends! Plus」のデジタル教材に加え、児童の意欲を高めたり理解を促したりするための自作教材）、ワークシート、動画 等

(2) 指導形態について

主に、次の4つの視点に立って研究を進め、その効果を検証した。

※それぞれの指導者の特性を生かした授業を展開し、その効果を検証する。

【学級担任の担う役割】

学年によって指導形態に違いはあるものの、授業には必ず学級担任が参加するようにする。学級経営が基盤となる外国語の授業において、児童との信頼関係がある学級担任が指導を行ったり、授業に参加したりすることで、児童の外国語に対する不安を軽減し、安心感を与えることにつながる。また、他教科等との関連を図るなど、担任だからこそできる役割を意識し、授業に臨むよう努める。

【小・中学校外国語教育コーディネーター（以下は小／中学校コーディネーター）の活用】

小学校1～4年生は、「学級担任＋小学校コーディネーター」「学級担任＋ALT＋小学校コーディネーター」、5年生及び6年生は、「学級担任＋中学校コーディネーター＋小学校コーディネーター」、「学級担任＋ALT＋小学校コーディネーター」「学級担任＋小学校コーディネーター」という形態で実施する。5、6年生の授業(70時間)の内、35時間は中学校コーディネーターが授業に参加し、その専門性を、授業中の指導や教材等の作成に生かすようにする。なお、学級担任の外国語の指導経験等により、小・中学校コーディネーターが担う役割を調整する。

小学校コーディネーターは、このような形で全学年の授業に関わり、学年間の学びをつなげ系統性をもったカリキュラム編成・指導の実現をめざす。

【教科としての指導における専科制と担任主導の可能性の検証】

教科として授業を実施するに当たり、平成26年度からは、試行的に、一人の指導者（外国語活動指導経験が豊富な担任や小学校コーディネーター）が担当して専科制の有効性を検証してきた。さらに、平成28年度からは、全ての学級で担任が主導する授業を試み、その可能性や必要な条件等について探る。

(3) 評価について

まず、中学卒業時のゴールを明確し、小学校5・6年生から中学3年生までの一貫したCAN-DOリストの形式による学習到達目標を設定し、小・中学校間で共通理解を図った。それを踏まえ、本年度は実態に即した評価の在り方を研究する。

教科「外国語」では、昨年度の試行を踏まえ、授業中の行動観察や振り返りカードの活用等に加え、5・6年生全員対象に、クイズ形式のテスト（アルファベットや単語の認識度を測ったり、英語を聞いての理解度を測ったりする）、パフォーマンステストを実施するとともに、家庭へのフ

ィードバックの方法についても研究を進めた。

【中学校】

(1) 指導形態について

本年度は、カナダとアメリカからの2名のALTによる指導体制を取り入れ、より多くのチームティーチングを実施している。さらに各学年とも、2名のJTEによる指導形態を取り入れ、より一層きめ細やかな指導に努めている。また、教科としての外国語の指導を70時間受けた生徒を受け入れるにあたり再編成した「スタートカリキュラム」については、小・中コーディネーターが主となり指導を進めた。

(2) 指導内容と方法・教材について

英語で授業を行うことのさらなる推進と生徒が英語に触れる機会の充実を図っている。授業における各活動のねらいを明確にし、指導方法や教材を工夫しながら授業を行っている。特に、小学校外国語教育で大切にしている目的意識と相手意識を持たせることを中学校でも継続し、内容に踏み込んだ言語活動を行うことを重視している。授業では、生徒が英語を使ってコミュニケーションを図る必然性のある場面を設定すること、相手を意識して自分の意見や考えを互いに伝え合う活動を工夫することを大切にしている。

教材についても、生徒の興味・関心を喚起し、理解を助けたり深めたりするために、身近な話題を使ったICT教材等の開発や有効活用に一層努めている。

○コミュニケーションの相手を意識した学習形態の多様化を図る。

小学校での外国語の授業に数多く参加し、教員研修を継続することにより、多様性のある学習形態の工夫が大切であると感じている。授業では、コミュニケーションの相手を意識した学習形態を展開するように心がけ、「学び合い」により、生徒が協働して課題に取り組めるような授業展開を心がけている。

○生徒が興味・関心をもつ身近な話題について実際の場面を想定した言語活動を行うことで、相手を意識しながらコミュニケーションを展開させる指導を展開する。

授業では、生徒の身近な話題について、実際の場面を想定したコミュニケーション活動を展開させている。具体的には、生徒が興味・関心を持つ身近な話題を取り上げ場面設定を行い、生徒が自分で言葉を選んで自分の思いを伝えることができるような言語活動を展開するようにしている。最終的には、4技能の統合的な育成を目指している。

○その場で考えながら話すような言語活動の設定と目的意識のある完成度の高いスピーチをめざす指導を展開する。

「即興で英語を話す力を育てる」を常に念頭に置き、様々な場面でその場で考えながら話すようなペアトーク等を設定し、1年生から帯学習として継続して指導を進めている。スピーチやインタビューテストにおいて、ALTや生徒からの突然の質問に対して自分の感想や意見を即座に述べたり、相手に問い返したりできるようにする。一方、準備して行うスピーチの場合は、生徒が自信を持って、クラス全体でのスピーチに臨めるようにするためのサポートとして、JTEが一人一人の練習を支援し、ALTも個別発音指導を行っている。

○個に応じた学び方への支援を充実させ、自律した学習者の育成を図る。

現行の学習指導要領では、生涯学習の視点が取り入れられ、自律した学習者を育てることが重視されていることを踏まえ、1年生から自ら学ぶことの大切さを理解させるとともに、英語の学び方などを身に付けさせるようにしている。目的に応じた辞書活用を推進し、言語活動に必要な語彙力を高めるための支援を継続している。また、英語検定に向けてのカウンセリングの時間を増やすなど学び方の支援の充実を図っている。

○英語運用能力向上を支える基礎的な力の育成のための家庭学習の充実を図る。

英語力は、授業で養う力と、それを補い強化していく家庭学習との両輪により形成されると考える。よって、授業で学んだ言語材料を、場面設定を変えて活用させるなど課題の出し方を工夫し、生徒が英語を書きたくなるような家庭学習が行えるようにしている。生徒の作品は必ず教師が確認し、優れた点や共通した誤り等を全体で共有するようにし、効果的なフィードバックを行うように努めている。

5 研究の計画と経過

<p style="text-align: center;">第一 年次</p>	<p>組織づくりとともに実態把握，教員研修を進め，新教育課程実施への準備をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○運営指導委員会，外部評価委員会，研究推進協議会の設置 ○コーディネーターの効果的な活用方法についての研究，計画，試行（小・中） ○9年間の教育課程，カリキュラム，新設教科の位置付け，目標，評価（規準・方法）等についての研究と素案作成，一部試行（小・中） ○教員の指導力向上のための研修計画の作成と実施（小・中） ○地域人材を活用した体験活動実施に関する研究，計画（小・中） ○特別教育課程実施前の児童生徒，教員，保護者の意識調査の実施と分析 ○校内体制の構築，校内環境整備に関する計画・実施（小・中） ○保護者・地域への啓発（次年度へ向けての環境整備）（小・中） ○新教育課程へ向けての教材・教具，機器等の環境整備（小・中） ○研究の成果・課題の検証と次年度の計画（小・中）
<p style="text-align: center;">第二 年次</p>	<p>仮説に基づく実践を段階的に開始し，実践を通して成果・課題を検証する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○新教育課程とカリキュラムの実施（6年生は一部試行）と検証，改善（小） ○4技能を総合的に育てる授業研究とその成果の検証，カリキュラムや評価についての研究・改善（中） ○コーディネーターの効果的な活用方法についての研究，運用，改善（小・中） ○教員研修の実施（一年次の研修を改善）（小・中） ○地域人材を活用した体験活動の実施と検証，改善（小・中） ○有効な連携（小・中）の研究，推進（教員相互の授業参観，TT，作品・ビデオ等を活用した授業実践，児童生徒の交流行事等），高校や大学との連携についての研究 ○児童生徒・教員・保護者の意識調査の実施，前年度や他地域の結果との比較，分析（小・中） ○研究の成果・課題の検証と次年度の計画
<p style="text-align: center;">第三 年次</p>	<p>新教育課程の実施。実践を通して成果・課題を検証し，次年度への改善を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○新教育課程とカリキュラムの実施（「外国語科」は，5年生が50時間程度，6年生が70時間に）評価と指導方法等の研究，その成果の検証と改善（小） ○小学校で年間50時間程度「外国語科」を経験した中学1年生を対象にしたカリキュラムの実施，その成果の検証と改善（中） ○4技能を総合的に育てる授業研究，評価方法の研究。その成果の検証と改善（中） ○コーディネーターの効果的な活用方法についての検証，運用改善（小・中） ○教員研修の実施（前年度の研修を改善）（小・中） ○地域人材を活用した体験活動の実施と検証，改善（小・中） ○有機的な小・中・高・大学間の連携の研究，推進，改善（小・中） ○児童生徒，教員，保護者の意識調査，他地域との比較（小・中） ○中間発表会の開催（小・中） ○研究の成果・課題の検証と次年度の計画
<p style="text-align: center;">第四 年次</p>	<p>新教育課程の完全実施。実践内容の改善を図りながら，研究の成果と課題をまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○研究推進協議会，運営指導委員会，外部評価委員会の開催 <ul style="list-style-type: none"> ・研究の方向の修正，計画，共通理解，市としての今後の方針を検討 ○特例による新教育課程，カリキュラムの完全実施 成果の検証とまとめ（小） ○コーディネーターの効果的な活用についてのまとめ（小・中） ○有機的な連携の在り方についてのまとめ（高・大も含む） ○教員の指導力向上のための授業研究会の実施 ○地域人材を活用した国際的な視野を広げる取組やコミュニケーション能力を育成するための体験活動の在り方についてのまとめ ○校内体制の構築と指導力向上のための研修の在り方についてのまとめ ○児童生徒，教員，保護者の意識調査，分析，他地域との比較（小・中） ○研究の成果・課題のまとめ（研究推進協議会・運営指導委員会・外部評価委員会） ◎鳴門市小・中学校研究開発推進準備会の設置，開催

6 年次評価計画

第一 年次	<ul style="list-style-type: none"> ・次の項目に関する評価に関して、その内容や方法等について研究を行い、評価計画を立てる。 【指導と到達度に関する評価】 新しい教育課程実施前の実態を把握し、次年度の計画に生かす。 ・毎時間の行動観察，児童生徒の振り返りシート，感想等の活用，ビデオ等の記録，質問テスト，アルファベットテスト，パフォーマンステスト，意識調査（小） ・毎時間の行動観察，生徒の自己評価シート，感想等の活用，ビデオ等の記録，スピーキングテスト，児童英検，英検，意識調査（中） 【教員の意識について】 ・校内研究推進委員会が定期的に教員対象にアンケート等を実施。 【児童生徒の英語能力以外の分野への波及効果について】 ・調査方法を検討，実施。結果の分析。 【保護者の意識について】 ・アンケート調査を実施。検証。 【研究推進・事業全体について】 ・研究推進協議会の開催。問題点，改善点等について協議。研究の方向性を修正する。 ・運営指導委員会や外部評価委員会による評価，助言。
第二・ 三年次	<p>前年度の評価結果を踏まえ，新教育課程を段階的に実施し，研究開発を推進する。それぞれの分野で評価を行う。その成果・課題を検証。前年度と比較しながら，改善につなげる。次年度の評価計画を立てる。</p> <p>前年度の評価結果を踏まえ，新教育課程を段階的に実施し，研究開発を推進する。中間発表会を開催することにより，3年間の取組を整理し，その成果・課題を検証するとともに，改善へつなげる。次年度の評価計画を立てる。</p>
第四 年次	<p>前年度の評価結果を踏まえ，新教育課程を完全実施し，研究開発を推進する。前年度の計画どおり，それぞれの分野で評価を行う。4年間のデータを集計・分析し，本研究開発のまとめを行う。</p>

7 研究開発の成果

(1) 児童・生徒への効果

〈小学校〉

○ 授業への意欲の高まり

平成28年度に実施した意識調査によると，3年生から6年生までの約9割の児童が外国語の授業を「好き」「どちらかといえば好き」と肯定的に捉えていることが分かった。授業中の様子や振り返りシートの「外国語の時間が楽しかった」「ALTの先生と話せてうれしい」等の感想からも，児童が積極的に取り組んでいる様子が伺える。

こうした結果から，他教科等との関連を図り児童の実態や興味・関心に即した単元構成，また，「5つのキーワード」に沿った授業づくりの妥当性が確認できたと捉えている。

○ コミュニケーションへの意欲の高まり

平成28年度の意識調査の「外国語の授業の中で楽しいと思うことはどのようなことですか」という設問のうち，コミュニケーションに関する質問に注目してみると，肯定的な回答（「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」）をした本校児童の割合が各項目で9割を越えており，全国平均を大きく上回っていることが分かる。

これらの結果は，他者（友達や指導者など）との関わりを大切にしたい，児童が思わず「聞きたくなる」「伝えたいくなる」ような「心が動く」授業づくり，また，中身のあるコミュニケーション場面の設定に努めた取組の成果によるものと考えられる。

○ 「文字」に対する興味・関心の高まり

5・6年生の外国語科においては，段階的に「読むこと」（音や文字を手がかりに意味を理解する）や「書くこと」を扱ってきた。当初は，文字指導による児童への負担感・意欲の低下などを危惧していたが，6年生の意識調査結果を3年間で比較してみると，肯定的な回答をした児童の割合が，年々増加（66.2%（H26・5月）→80.8%（H27・5月）→84.8%（H28・5月）→91.4%（H28・11月））していることが分かった。

こうした結果は，「文字」を扱う際，「書きたいことを書く」という場面設定や必然性，コミュニケーション活動との連動を重視し，「ツールとしての文字がもつ力・よさ」を実感させる

ことができるよう、教材や指導方法等について、毎年、修正・改善を重ねて来たことによるものとする。授業中の発言や振り返りシートからも、「今まで話していたことが書いてうれしかった。もっといろいろな言葉を書いてみたい」等の声が聞かれ、日常生活の中でも自主的に文字を書いたり読んだりしようとする姿が見られるなど文字に対する興味・関心が高まってきた。

○ 技能面（「話すこと」「聞くこと」）の定着

教科「外国語」の単元構成は、音声に十分慣れ親しんだ後、「読むこと」「書くこと」の活動に移行し、それを単元終末のコミュニケーション活動へとつなげるようにした。つまり、一単元にかかる時間を活動型より2～3時間多めに設定し、無理なく目標が達成できるよう授業を組み立てた。

その結果、英語クイズ（ペーパーテスト）において、「英文を聞いて意味に合う文を選択する」「単語の音声を聞いて適する絵を選択する」といった知識・理解の能力を問う問題で、5、6年生ともに100%正答という結果が得られた。さらに、パフォーマンステストにおいても、ALTやJTEの問いを理解し、全員が初歩的な外国語を用いて答えることができた。こうしたことから、「聞くこと」「話すこと」に関して、表現や理解の能力の定着が図られていることが成果として挙げられる。

○ 評価による自信・意欲の向上

CAN-DO リストの形で学習到達目標を作成し、試行を踏まえ、昨年度より、自作テストとパフォーマンステストを実施している。実施に当たっては、内容や実施方法等について工夫し、児童の精神的な負担の軽減や自信・意欲の喚起について配慮した。その結果、終了後に寄せられた感想（「ぼくはあまり自信がなかったのですが、やってみると意外と簡単で楽しかったです。力がついてきていると感じました」など）はどれも前向きなものであり、自信や意欲に溢れていた。

こうしたことから、内容や実施方法等について十分配慮すれば、評価は、児童の力を可視化し、教師にとっての指導改善の貴重な資料となるだけでなく、児童の自信や意欲を喚起する上で大変有効であることが確認できた。

〈中学校〉

○ 授業への関心・意欲の向上

生徒への意識調査の結果から1年生は83.8%、3年生は89.2%が英語を「とても好き」「どちらかといえば好き」と肯定的にとらえ、英語学習に興味・関心をもって取り組んでいることが分かる。現3年生の経年比較を見ると、H26年度に「とても好き」「どちらかといえば好き」と回答した生徒の割合は82.3%であり、H28年度には89.2%に増加している。

○ コミュニケーションへの意欲の向上

生徒への意識調査の「ペアやグループでのコミュニケーション活動への意欲」に対する回答からは、1年生は85.2%、2年生は81.5%の生徒が肯定的に捉えていることが分かる。3年生は75.6%の生徒が「ペアやグループでのコミュニケーション活動が好き」と捉えている。

○ 英語力の向上

生徒の英語力の実態を把握し授業改善に役立てるとともに、生徒に英語学習の成果を意識させ、英語学習への意欲の向上を図るため、英検や英語能力判定テストなどの外部テストを積極的に活用してきた。英語能力判定テストの結果を経年比較すると、次のようになっている。1年生は英検5級レベル以上が、H25年度45.9%、H26年度69.0%、H27年度73.7%、2年生の英検4級レベル以上が、H25年度54.6%、H26年度57.8%、H27年度56.1%、3年生は、英検3級レベル以上が、H25年度19.8%、H26年度35.2%、H27年度38.9%となっている。そして、本年度実施した英検IBAの学年別の結果は次のようになっている。1年生は英検5級レベル以上が81.4%、2年生の英検4級レベル以上が65.0%、3年生は3級レベル以上が66.4%となっており、その中で準2級レベルが35.4%を占めている。

(2) 教員への効果

〈小学校〉

特例の教育課程実施3年目となった本年度、作成したカリキュラム等を見直すに当たり、「児童に学ぶ」ことの大切さを再認識した。授業観察や振り返りシート、意識調査結果等から児童の思いを汲み取り、求めているものを探り、授業を創りまた改善していく。「指導と評価の一体化」に向けて、その過程は欠くことのできないものであることを改めて児童から学んだ。また、年間を通して、理論研修、研究授業、プラン研修等、多様な研修を計画的に実施したことにより、外国語教育に対する教員の意識や研究意欲、指導力・英語運用能力の向上につながった。さらには、様々な指導形態を組んだことで、指導者同士が互いの特性を知り、学び合い、自身の授業を見直す機会ともなった。

〈中学校〉

小学校からの学びのつながりを意識した指導方法に関する研修を数多く実施した。小中連携の視点から小学校の授業に数多く参加し、指導方法の継続に配慮し、「学びがつながる」カリキュラム作成に生かすことができている。小学校で活用している教材・教具を授業導入時に効果的に生かすための研修を継続している。特に本年度は、小学校で教科としての外国語の授業を70時間受けてきた生徒を迎えるにあたり、小学校から中学校への円滑な接続を図るスタートカリキュラム再編成に関する研修を行った。また、生徒の理解を補助するための ICT 教材の作成や身近な話題で4技能を統合的に活用する指導方法に関する研修を実施し、教員の意識改革を図った。

〈小・中学校〉

研究開発に取り組む中で、「情報交換」から「交流」、「連携」へと、小中学校間関係が一步ずつ進んできた。それに伴い、学習進度や内容、教材、作品等に関する情報交換が増え、それらを相互の授業に取り入れ、生かすことができるようになった。小学校では中学校における学習を見据え、また、中学校では小学校での学びを踏まえながら、日々の授業にあたることができるようになったことは大変大きな収穫である。また、時と場を同じくして協議を重ねる中で、小中教員が互いを知り、相互理解を深め、心の距離が縮まり、信頼関係が徐々に構築されてきたことを感じる。校種を越え教員間がつながることで、初めて、学びの円滑な接続が実現するということが確認することができた。

(3) 保護者への効果

参観日に授業を公開したり、ねらいや実践内容について努めて周知するようにした。そうしたことにより、全学年の保護者を対象にアンケート調査を実施したところ、小学校外国語教育を肯定的に捉え大きな期待を寄せる保護者の声が多く聞かれた。また、個人懇談等を通して、「外国語の授業を毎週楽しみにしている。英語の絵本を買い文字を読もうとしている」など、外国語に積極的に関わる児童の姿を保護者から伝えられることが多くなった。

中学校においても、保護者から「さらに語学力を伸ばして、将来それを生かせる仕事に就きたいという目標が明確になったようである」というような英語教育を好意的にとらえる感想が寄せられている。

8 実施上の問題点と今後の課題

(1) 教育課程

〈小学校〉

- 意識調査結果によると、全体的には外国語活動や外国語科に対して肯定的な意見が多いものの、そうではない児童が少なからずいる。今後も継続して、カリキュラムの内容や授業プラン等をさらに見直し、より児童の実態に合わせたものに改善していく必要がある。
- 継続可能で意味のある評価の在り方についてさらに研究していく必要がある。

〈中学校〉

- 来年度は、教科としての外国語を120時間経験した生徒を受け入れることになる。よって、小学校での学びを生かしたカリキュラムのさらなる改善が求められる。
- 生徒の興味・関心を高め、学びを深めるため、他教科や他領域、総合的な学習の時間との関連をさらに図る必要がある。

(2) 指導方法・教材等

〈小学校〉

- 学年の発達段階に応じたアクティビティや教材の発掘、開発を一層進める。
- アルファベットを認識し、正しく読めて書けるようにするには継続的な指導が必要である。モジュールの時間を活用するなど系統的、継続的な指導についての研究が一層求められる。
- 文字を「読む」「書く」活動に対して著しい困難を抱える児童がいる。そうした児童への手立てについてさらに研究していく必要がある。
- 児童の意欲を高め、思考を促し、理解を補助する等の ICT 教材の開発を一層進める。
- 「話すこと」「聞くこと」の定着を図るために、単元で扱った語彙や表現をスパイラルに扱うことを意識した授業づくりを進める必要がある。

〈中学校〉

- 小学校からの学びのつながりをさらに重視し、高い意欲を継続させるための教材や学習活動の工夫、指導方法の改善を継続させることが必要である。
- 言語運用能力を支える語彙力を高めることや、効果的な家庭学習の在り方についての研究も続けていかなければならない。
- 言語活動において、単純な繰り返しや安易な質疑応答に陥ることなく、常に効果的なフィードバックとステップアップをしながら、真に自分の考えや気持ちを伝え合うことのできるような場面設定や教材の工夫を行っていかなければならない。

鳴門市林崎小学校・里浦小学校 教育課程表（平成28年度）

	各教科の授業時数									道徳	外国語活動	総合学習的な時間	特別活動	外国語科	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育						
第1学年	306	/	136	/	102	68	68	/	102	34	/	/	34	/	850
第2学年	315	/	175	/	105	70	70	/	105	35	/	/	35	/	910
第3学年	245	70	175	90	/	60	60	/	105	35	35 (+35)	35 (-35)	35	/	945 (0)
第4学年	245	90	175	105	/	60	60	/	105	35	35 (+35)	35 (-35)	35	/	980 (0)
第5学年	175	100	175	105	/	50	50	60	90	35	0 (-35)	35 (-35)	35	70 (+70)	980 (0)
第6学年	175	105	175	105	/	50	50	55	90	35	0 (-35)	35 (-35)	35	70 (+70)	980 (0)
計	1461	365	1011	405	207	358	358	115	597	209	70 (0)	140 (-140)	209	140 (+140)	5645 (0)

鳴門市第二中学校 教育課程表（平成28年度）

※現行通り

	各教科の授業時数									道徳	総合学習的な時間	特別活動	総授業時数
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術家庭	外国語				
第1学年	140	105	140	105	45	45	105	70	140	35	50	35	1015
第2学年	140	105	105	140	35	35	105	70	140	35	70	35	1015
第3学年	105	140	140	140	35	35	105	35	140	35	70	35	1015
計	385	350	385	385	115	115	315	175	420	105	190	105	3045

学校等の概要

- 1 学校名 ① 鳴門市林崎小学校 ② 鳴門市里浦小学校 ③ 鳴門市第二中学校
 校長名 ① 中山 淑子 ② 吉川 和則 ③ 西條 一之
- 2 所在地 ① 徳島県鳴門市撫養町立岩字内田 7 3 番地の 1
 ② 徳島県鳴門市里浦町里浦字西浜 4 0 1 番地
 ③ 徳島県鳴門市撫養町立岩字内田 1 5 0 番地
- 電話番号 ① 088-686-2469 ② 088-686-0236 ③ 088-685-7911
 F A X 番号 ① 088-686-2467 ② 088-685-0276 ③ 088-685-7912

3 課程・学科・学年別幼児・児童生徒数、学級数

① 鳴門市林崎小学校

第 1 学年		第 2 学年		第 3 学年		第 4 学年		第 5 学年		第 6 学年		特支		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
50	2	61	2	46	2	49	2	50	2	57	2	20	4	333	16

② 鳴門市里浦小学校

第 1 学年		第 2 学年		第 3 学年		第 4 学年		第 5 学年		第 6 学年		特支		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
18	1	19	1	25	1	21	1	27	1	24	1	8	3	142	9

③ 鳴門市第二中学校

第 1 学年		第 2 学年		第 3 学年		特支		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
70	3	99	3	114	4	3	2	286	12

4 教職員数

① 鳴門市林崎小学校

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養職員	講師
1		1			19	2	1		1	
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
(2)	(1)	1		26 (3)						

② 鳴門市里浦小学校

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1		1			11		1			
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
(2)	(1)	1		15 (3)						

③ 鳴門市第二中学校

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1		1		1	17	1	1			
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
(2)	(1)	1		23 (3)						